テュルク英雄叙事詩の地域的特徴
『チョラ＝バトゥル』の分類をもとに

The Regional Peculiarity of Turkic Heroic Epics :
on the Classification of "Chora Batir"

坂井　弘紀*
SAKAI Hiroki

キーワード：中央ユーラシア，テュルク系民族，英雄叙事詩，「記憶」の伝承，「歴史のイメージ」
KEY WORDS : Central Eurasia, Turkic peoples, heroic epic, bequeathment of "memory", "image of history"

The Turkic heroic epic, Chora Batir spreads among Turkic peoples, Kazakhs, Karakarpak, Nogays, Bashkorts (Bashkir), Kazan-Tatars, Crimean-Tatars and so on. In the Turkic heroic epics of Central Eurasia the enemies of the hero are generally actual historical people. Therefore we can recognize historical facts from the epics.

The historical circumstances of the Kipchak steppe and the view against them of Turkic peoples are also found in the epic, *Chora Batir. Chora Batir* is one of the most suitable epics for the study of the relation of epics and historical events.

Twenty seven versions of texts of *Chora Batir* have come out so far, but the comparison of all these texts is not found in the preceding studies. In this thesis I analyzed 20 versions according to the following point of view : 1. synopsis, episode and motif, 2. characters and their names, 3. description of historical events, 4. regions and places described.

Then, I classified the versions of *Chora Batir* into the following version groups : I. (1) Crimea, Doburca, (2) the Volga valley, Caucasus, II the Kazakh steppe, the Syr valley. It has become clear that the concrete historical events conserning the surrender of Kazan city to Russia, are described in Version Group I, on the other hand, the historical image emerged in the process of the severe and long struggles against Kalmyks is reflected in Version Group II.

Such analysis reveals how the historical memories of a region or nation are reflected on the epics. The study of the characteristics of each versions is useful for understanding the views of history of the Turkic peoples.

＊北海道大学スラブ研究センター COE 非常勤研究員　COE Research Fellow, Hokkaido University

はじめに

中央ユーラシアのテュルク系民族*1は数多くの叙事詩*2を伝えてきた。叙事詩には，彼らの習俗や信仰，歴史や世界観など種々の厖大な知識と情報が縦横に織り込まれているため，彼らの文化や社会を研究する上での資料としてたいへん有益である。中央ユーラシアのテュルク系民族，とくに遊牧系民族は文字の使用が一般的ではなかったために，叙事詩はもっぱら口承によって代々語り伝えられており，そこには集団の知識や経験が端的に表現されているのである。中央ユーラシアのテュルク系英雄叙事詩では，主人公のバトゥル（батыр, ботир，勇士・英雄の意）の戦う敵が空想的な怪物や妖怪ではなく，実在した「民族」であることが多く，「異民族」との戦いなどの歴史的な出来事が叙事詩に集団の記憶として刻み込まれ，伝えられてきた。そのため，叙事詩から集団の記憶となった歴史を読みとる試みもなされている［坂井 1994, 1995, 1997］。このことは，文字を用いて歴史を伝えることがほとんどなかった遊牧民の歴史を彼らの視点から理解する上でも不可欠な作業である。また，ある「民族」がいつ，どのように形成されたかという問題を検討する際にも，民族の歴史的シンボル・集合的記憶である叙事詩の利用は有効であると考えられる［宇山 1998：90, 112；坂井 1997］。

中央ユーラシア＝テュルク系の代表的な叙事詩として，『アルパミシュ（Алпомиш）』や『ゴルオグル（Гўрўғли）』，『コルクト（Korkut）』，『コブランドゥ（Кобланды）』などの作品*3が挙げられる。これらは登場人物やエピソードの細かな相違点はあるものの，「共通の文化遺産」として中央ユーラシアの広範な地域に伝えられている作品である*4。これらの作品の諸ヴァリアント*5を比較することによって，それらが伝えられた地域や「民族」の様々な特徴が，これまでの研究によって明らかにされてきている。本稿で取り上げる『チョラ＝バトゥル（Чора батыр）*6』もまた，これらの作品と同様に注目すべき作品といえる。

なぜなら，この作品は中央ユーラシアの

＊1　本稿でいう「中央ユーラシア」とはテュルク系ムスリムの勢力が大きい，カザフ草原から黒海周辺に至る地域を指している。

＊2　ここでいう英雄叙事詩とは，原語ではジュル（жыр）やダスタン（дастан, достон），ヒッサ（хисса）などと呼ばれるジャンルを指している。また，「昔話」として伝えられるものもあるが，厳密な定義が難しいため，本稿では総じて「叙事詩」と表記することとする。

＊3　これらの作品は「民族」によって，それぞれ，Köroğlu・Көҗғлы，Қорқыт・Қўрқутота，Алпамыс・Алп-Манаш などの名称でも知られている。

＊4　たとえば，アルパミシュはアルタイ地方からアナトリアまで，コブランドゥはカザフ草原からクリミア半島までと広範な地域に伝播している。

＊5　本稿では，中央アジアの研究者の語法に基づいて，語り手あるいは採集者による「異版（ヴァリアント，вариант, нұсқа）」をヴァリアント，「民族」や「地域」などによる「異版（ヴァージョン，версия）」を版と表すことにする。なお，一般に，ヴァリアントは「ムルン＝ジュラウ（詩人）のヴァリアント」のように，またヴァージョンは「ウズベク＝ヴァージョン」のように使われるとされるが，その定義は十分ではなく，これらの言葉は研究者によって混用されることがある［Мирзаев 1968：25-30；Ахметов, Баҳадырова 1992：20-21］。

＊6　地域や民族によってチョラ（Чора）やショラ（Шора），チュラ（Чура）などと違いがあるが，本稿ではチョラと統一する。また作品一般を『チョラ＝バトゥル』と，作品の主人公を「チョラ」と表記する。

各地に伝えられているために，各地域に伝わる諸ヴァリアントを比較することで，どのような記憶を伝えてきたかという，それらの地域や「民族」の特徴を明らかにすることが可能であるからである。さらに『チョラ＝バトゥル』には，中央ユーラシアにおけるムスリム世界の象徴でもあった都邑カザンを攻める「異教徒」との戦いやキプチャク草原における国際関係とそれにたいする歴史認識が描かれているため，叙事詩から歴史を読みとる上で格好の素材となる。『チョラ＝バトゥル』はまさに，この作品が伝えられている地域あるいは「民族」の「歴史観」を知る上で大きく貢献する作品なのである。また，クリミアでは「民族英雄」であるとともに「民族団結の象徴」であったり，カザン＝タタールやカザフではチョラ＝バトゥルを自らの先祖と見なす系譜が伝えられていたりするなど，社会的に重要な役割を果たしている点も興味深い。

本稿では，まずこれまでの『チョラ＝バトゥル』にたいする研究者の評価および研究成果が，国や地域によって大きく異なっていることの具体例とその理由について論ずるとともに，この作品の諸ヴァリアントにそれぞれどのような特徴があるかを明らかにした上で，それらを分類することにより，『チョラ＝バトゥル』のテーマやメッセージが「地域」によって異なること，その理由がその地域および「民族」の「歴史観」に由来すると考えられることを提示してみたい。

Ⅰ．先行研究における問題点

1．『チョラ＝バトゥル』はどのような作品か

『チョラ＝バトゥル』は，東はカザフ草原から西はアナトリア，バルカン半島におよぶ地域のテュルク系諸民族，カザフ，カラカルパク，ノガイ，バシュコルト（バシュキール），カザン＝タタール，チュヴァシュ，クリミア＝タタールなどに伝えられる英雄叙事詩である。この作品は，これらの民族における代表的な叙事詩作品として，他の叙事詩と同様に口誦によって，コブズ（қобыз）やドンブラ（домбыра）などの楽器の伴奏とともに代々伝承されてきた*7。その多くは韻文と散文が混交しているが，韻文あるいは散文のみのテクストもある。またその規模も数十行から六千行以上と幅がある。『チョラ＝バトゥル』は，他の多くのテュルク系叙事詩と同様に，19世紀後半になってはじめて採録・刊行された。以後，ロシア・ソ連を中心に，トルコやルーマニアでも採集され，公刊されている。

中央ユーラシア＝テュルク系の叙事詩『アルパミシュ』や『ゴルオグル』などは，これまで一般に広く知られ，比較研究など一定の研究成果が得られている。しかし，『チョラ＝バトゥル』は，これらの作品と同じく広範な地域に伝わりながら，研究者の間における認知度はあまり高くなく，その研究の蓄積も乏しい。さらにこの作品への研究者の視点や見解はまちまちであり，作品についての共通の評価さえ確立されて

＊7　『チョラ＝バトゥル』は，キュイと呼ばれる器楽曲のテーマにもなっており，ウクラス Ықылас 作曲による「カザン」では，カザンへ向かったチョラの死を歌っている。

はいない。この作品が伝えられた地域の大部分はソビエト連邦に包含されていたが，ソ連時代，この作品について論じられることは少なかった。ソ連時代には，『チョラ＝バトゥル』に限らず，叙事詩についての研究は，フォークロアや文学作品として，主にジャンル分類や登場人物の描写など詩学的関心に基づく観点に立脚して行われており，上記のような関心から研究されることはほとんど皆無であった。また，ソ連国外，すなわち欧米やトルコにおいても『チョラ＝バトゥル』に関する本格的研究は行われてこなかった。先に挙げたような，この作品の特長に注目することはしばしばあったが，それについて具体的な論考がなされることはきわめて希だったのである。しかし，ペレストロイカ期以降，『チョラ＝バトゥル』の様々な版が出版されるようになり，またソ連邦崩壊とそれにともなう新国家の独立によって，これまでの様々な制約が解かれ，現在では本格的な研究のための環境も整いつつある。

このような状況の下で行われてきた数少ない先行研究について一瞥してみると，まず『チョラ＝バトゥル』という作品の捉え方が研究者によってきわめて大きく異なっていることがわかる。アメリカの研究者パクソイや山内昌之は，『チョラ＝バトゥル』には強力な反ロシア的メッセージが込められていたとする［Paksoy 1986：253；山内 1991：102］。タタール人ムスリムであるチョラが，キリスト教徒ロシア人の少女との結びつきを選んだために死に至り，カザン陥落を招いたというエピソードには，異教徒・征服者とムスリムとの結婚には未来に危険が待ち受けているという警告が込められているということを指摘し［Paksoy 1986：260；山内 1991：98］，『チョラ＝バトゥル』にタタールとロシア，ムスリムとキリスト教徒という対立構図を見いだす。またトルコ人研究者トゥラルも，「『チョラ＝バトゥル』は，ロシアの侵略が始まった時代，この地域に居住するタタール人にとってロシアの侵略にたいする精神的な力，甲冑，盾なのであった［Tural 1995：241］」と，その反ロシア性を強調している。

これにたいし，カザフの著名な叙事詩研究者ベルディバエフは，『チョラ＝バトゥル』が16世紀のロシアのカザン攻略を描いた作品であるという考えにたいして異議を唱え，この作品は後世の語り手の空想の産物であると結論づけている［Бердібаев 1995：190-191］。さらにロシアの研究者ロディオノフは，「チョラはロシアの助けを借りて，カザン＝ハン国のくびきから人々を解放した［Родионов 1983：22］」と，ロシアはチョラの敵ではなく同盟国であり，チョラはカザン＝ハン国と戦ったと指摘する。

このように，欧米・トルコ・日本など旧ソ連外の研究者が『チョラ＝バトゥル』の反ロシア的性格を強調するのにたいして，ロシアやカザフスタンなど旧ソ連の研究者はロシアがチョラの敵であることを否定する立場に立っていることを，まず指摘しておきたい。

2.『チョラ＝バトゥル』は歴史を伝えているか

次に先行研究における，この作品と歴史との関わりについての見解を見てみたい。『チョラ＝バトゥル』が史実を伝えている

か否かは，研究者によって大きく意見が分かれる。

パクソイは「『チョラ＝バトゥル』は，ロシアのカザン征服に先立つカザンとクリミアの二つのタタール＝ハン国での出来事や社会状況を描いた作品で」，「中央アジアのアイデンティティの本質的な問題を示す口誦の歴史である」と述べている［Paksoy 1986：253］。また，山内昌之は「タタール人の残した史料へのロシア史研究者の関心は驚くほど少なかった」が，「タタール語で収録された『チョラ＝バトゥル』はこの欠を補う史料になる」と考える［山内 1991：78］。こうした考えに基づいて，パクソイはこの作品から，カザン＝ハン国やクリム＝ハン国，モスクワ公国の複雑な外交関係やカザンでの内訌，クリミアでの徴税システムなどの様々な史実を読みとっている［Paksoy 1986：259-260］。

一方，ベルディバエフは，『チョラ＝バトゥル』に描かれていることは，語り手による空想の結果であり，「『チョラ＝バトゥル』の歴史的な背景を探そうとしても，この作品に描かれているような史実は見いだせない」として，歴史的な出来事と『チョラ＝バトゥル』との関係を完全に否定している。その理由として，『チョラ＝バトゥル』に描かれるチョラの敵はロシアではなくカルマク（қалмақ）*8であること，16世紀にカルマクがカザンを攻撃したという史実はなかったことなどを挙げている。さらに，叙事詩では一般にカルマクやクズルバス（қызылбас）*9なども「異教徒」と呼ばれることから，チョラが戦った「異教徒」をロシアと断定することを批判する［Бердібаев 1995：102-103, 197］。

このような見解の相違が生じた理由について，筆者は二つの点を指摘したい。そのうちの一つは，この作品のもつ性格に見いだすことができる。

ソビエト時代，英雄叙事詩の公刊やその研究は厳しい制約を受けていたが，なかでも『チョラ＝バトゥル』は，テクストの公刊はもとより閲覧さえも禁じられていた。これは，『チョラ＝バトゥル』の多くの版において，チョラと戦う民族がロシアであることが「諸民族の接近と融合」というソビエトの政策に相反するものであったためと考えられる。そのため，ソ連国内における『チョラ＝バトゥル』の扱いはデリケートなものとなり，『チョラ＝バトゥル』の反ロシア性については否定的な態度を取らざるを得なかった。そして，このような特異な状況が，欧米の研究者にそのアンチテーゼとして，この作品の反ロシア的性格をことさら強調させる要因にもなったのである。なお，近年では旧ソ連においても，自由な立場から論じられるようになり，たとえば，カザフの叙事詩研究者ウブラエフは「叙事詩に描かれる時代を知ることは，叙事詩の歴史との一致を理解することに役立つ［Ыбыраев 1993：150］」と叙事詩と歴

＊8　カルマクは，中央アジアのテュルク系民族のあいだではモンゴル系オイラトを指す。彼らが建てたジューンガルは，17世紀後半から18世紀中頃にかけて西方に侵攻し，とくにカザフは苛烈な被害を蒙り，大打撃を受けた。

＊9　中央アジアの英雄叙事詩にしばしば現れる「民族集団」。イル＝ハン国以降のイラン系民族を指すといわれるが，イラン・カフカースのテュルク系の人々も含むことがあるようである。

史との密接な関係を認めながら，チョラの育ったくにでは遊牧生活が，カザンでは定住生活がそれぞれ行われていたことを読みとるなど［Ыбыраев 1993：177］，次第に旧来の研究姿勢とは違った立場からの成果も現れつつある。

欧米と旧ソ連の研究者の見解が異なるもう一つの大きな理由は，それぞれが拠り所としているテクストが異なるという点である。パクソイや山内昌之が参考にしているテクストは，イスタンブルで公刊されたものに基づいており*10，他のヴァリアントは考慮に入れていない。トゥラルはクルグズ（キルギス）の叙事詩『マナス（Манас）』と『チョラ＝バトゥル』との比較に，ラドロフがクリミアで採録したヴァリアントを用いている［Tural 1995］。

一方，ソ連の著名な叙事詩研究者ジルムンスキーは，『チョラ＝バトゥル』については，ムルン＝ジュラウやディヴァエフのヴァリアントなどの「カザフ版」に言及するのみで，他のヴァリアントについてはまったく触れていない［Жирмунский 1974］。ウブラエフもまたディヴァエフやムルン＝ジュラウなど「カザフ版」を用い，ベルディバエフは，ムサベク＝バイザコフのヴァリアントなどカザフに伝わるテクストを利用している*11。また，ロディオノフが依拠しているのはチュヴァシュに伝わる『サラ＝パッタル（Сарă-паттăр）』である［Родионов 1983］*12。

このように，先行研究における『チョラ＝バトゥル』にたいする見解の相違は，それぞれが扱うヴァリアントがまったく異なっているにもかかわらず，数あるヴァリアントのうち任意のヴァリアントを取り上げて，『チョラ＝バトゥル』全般を論じていることに起因するのである。しかも，研究者のほとんどがそのヴァリアントを取り上げた理由を述べていない。ソ連の研究者の場合，それぞれの属する「民族」あるいは「共和国」の版のみにその関心が注がれ，他の「民族」の版は考慮に入れずに論じており，また欧米の研究者の場合は，ロシアとの対決を明確にするヴァリアントに比重を置き，そうでないヴァリアントに触れることはほとんどなかった。こうしたことから，彼らはまさに恣意的に論を展開することができたのである。

3.『チョラ＝バトゥル』とチュラ＝ナリコフ

ところで，先行研究においては，『チョラ＝バトゥル』の歴史との関わりについてもう一つ問題とすべき点がある。それは，歴史上実在したチュラ＝ナリコフ（Чура Нариков）という人物と『チョラ＝バトゥル』との関係である。中央ユーラシアのテュルク系英雄叙事詩には，『エディゲ（Едиге）』や『カラサイ・カズ（Карасай-

---

*10　このテクストは，ラドロフのカラスバザル版とブユクホジャラル版を基に，ベレジンのヴァリアントの結末を加えたものである。

*11　これらカザフのヴァリアントについては，表1を参照のこと。

*12　サラ＝バッタルが，上述のようにロシアの同盟者で，カザンのタタール人と闘ったのかは，残念ながら筆者の手元にこのテクストがないので不明である。なお，主人公サラは白鳥から生まれ，翼を持っているなど，『チョラ＝バトゥル』の他のヴァリアントとは異なり超自然的な勇士のようである。

Казы)』などの作品のように，歴史上の人物を主人公にした叙事詩はけっして珍しくはない*13。『チョラ＝バトゥル』もまた，歴史上の人物を主人公にしていると考えられることがある。種々の史料に見られるチュラ＝ナリコフこそ，その人物にほかならないというのである。この人物がまさに叙事詩の主人公の父の名をその姓としていることも，『チョラ＝バトゥル』との深い関連性を想起させずにはおかない。それではチュラ＝ナリコフとは，どのような人物であったのであろうか。

チュラ＝ナリコフ（以下，歴史上の人物チュラ＝ナリコフを「チュラ」と表記する）は16世紀前半のカザン＝ハン国の有力者であった。当時，カザン＝ハン国はモスクワ派とクリミア派とにわかれ，互いに覇権を巡って闘争を繰り広げていたが，ロシアの史料［Карамзин 1892］によると，チュラはモスクワ派のシャー・アリ（シィガリ）＝ハン（Шигали, Шах-Али）に仕え，クリミア派と争い，1545年，当時のカザン＝ハンであった，クリミア派のサファ＝ギレイ Сафа-Гирей にたいするクーデターを画策して，ロシアに援軍を求めた。その後，モスクワ派とクリミア派とのカザンの支配権をめぐる争いはさらに激化し，1546年，チュラはサファ＝ギレイによって殺害されたのであった。そして，1552年にカザンはロシアに占領され，以後ロシア支配下に置かれることとなるのである。

さて，カザン＝タタールの研究者ウルマンチェエフは，チュラを「当時の人物としては進歩的で，モスクワへの接近を支持した［Урманчеев 1983：31］」と高く評価する一方で，「彼は詩に描かれたチュラ＝バトゥルの原像ではありえない。カザンが占領される以前に彼は死んでいたからである［Урманчеев 1974：15］」と述べ，理想的な人物像であるチュラが作品の主人公として利用されたと説明している［Урманчеев 1983：31］。ベルディバエフもまた，実在したチュラはロシアの敵ではなく友人であった［Бердібаев 1995：103］と指摘した上で，ロシアのカザン攻略と実際のチュラとは無関係であったとし［Бердібаев 1995：190］，「歴史上の人物（チュラ）と叙事詩の想像から生まれたチョラとのあいだには天と地ほどの違いがある」と断定する。彼によれば「叙事詩のチョラは，歴史のいかなる具体的な出来事とも関係はなく，民衆の『このような勇士がいれば』という願望の結果，生まれたのである」［Бердібаев 1995：103］。このように，旧ソ連の研究者は実在したチュラがモスクワ派であったことを強調し，進歩的であったと肯定的に評価するとともに，カザン攻略以前にチュラが死亡していることを理由に『チョラ＝バトゥル』と歴史との関係を否定している。

一方，トルコの研究者イナンはチュラ＝ナリコフを「（叙事詩の）チョラほど愛国的ではなかった」とし，「叙事詩のチョラの美しい顔に一点の汚点を残している」［Inan 1968：77］と否定的に評価してい

＊13　しかしながら，『アブライ＝ハン（Аблай Хан）』，『ケネサル（Кенесары）』など18世紀以降の歴史上の人物を描いた，いわゆる「歴史叙事詩」といわれる分野の作品と比較すると，歴史的出来事の描写は具体性・詳細さを欠いている［坂井 1994；1995］。

る。その一方で，叙事詩のチョラ＝バトゥルについては，「民衆のあいだだけでなく，教養ある人々でさえも彼の愛国心を理想的な形として認めている」[Inan 1968: 77] と肯定的に見ており，その実例としてロシア革命後の独立時代*14のクリミアでチョラが偉大な民族英雄として謡われていたことを挙げている。さらにイナンは「我が民族の理想は，勝利であり，侵略する異民族との戦いであり，侵略者からの防衛である。その理想はチョラ＝バトゥルの名前に謡われている叙事詩に力強く反映されている」[Inan 1968: 77] と，実在したチュラと主人公のチョラとの関係よりも，『チョラ＝バトゥル』という作品が人々にとってどのような存在で，社会的にどのような役割を果たしたかについて強調している。

さて，実在したチュラがロシアと戦うどころかモスクワ派であること，およびカザン攻略より以前に処刑されているということで『チョラ＝バトゥル』という作品がまったくの空想であるとする見解は妥当であろうか。ウルマンチェエフらは，チュラ＝ナリコフがカザン攻略以前に処刑されたことを挙げているが，叙事詩においてチョラはカザンが陥落する前に死んでおり，彼らの指摘となんら矛盾しないことに注意すべきである。

このように，研究者によってその理解の仕方は様々であるものの，「ロシアと戦う叙事詩の主人公」と「ロシア側にいた歴史上の人物」との行動の矛盾の存在は，先行研究において完全に認められているようである。しかし，チュラがロシアとは戦わなかったかどうかという点については，さらなる検討が必要ではないだろうか。チュラがロシア派であったということは，ロシアの年代記やカラムジンの『ロシア国家史』などロシア側史料によるものであって，タタール側の史料ではない。カザン＝タタールには叙事詩のほかにも，ロシアと戦って死んだチュラについて伝える史料が存在する。たとえば，タタール人によって書かれた『タタール年代記 [*История Татарии...* 1937]』には，「（ロシアに）ムスリムは敗北した。そのとき，マリク（原文ママ）の息子チュラが気高く死んでいった。ムスリムの中枢は破壊され，多くの信者が死んだ。このあと，ムスリムのアミールたちはすべての勇士たちや妻たちとともにロシアの手に落ち，凌辱を受けた」[*История Татарии...* 1937: 123] との叙述がある。また，カザン＝タタールに口伝される系譜には，チョラがカザン＝タタール人の先祖の一人として挙げられており，「チュラ＝バトゥルはイワン雷帝の軍隊と戦ってズル＝カラウジャ（Зур Караужа）*15で死んだ」と伝えられている [Әхмәтҗанов 1995: 33-34]*16。チュラについては，このように，まったく異なる二つの像が伝えられているのである。叙事詩の主人公とチュラ＝ナリコフには数多くの一致や共通点があり，何らかの関係

---

*14　1917年11月28日，クリミア人民共和国が宣言された。この国は半年ともたなかったが，独立時代とはこの時代を指している。

*15　現在のタタルスタン共和国ゼレノドル地区にある地名。

*16　なお，系譜には「チュラ＝ビーはカザン＝ハンにたいする背信のために口に熔けた銀を流され殺された。チュラ＝ビーはモスクワ皇帝に秘密を売っていたのであった」とするヴァリアントもあり，系譜にも相反するチョラ像があることはたいへん興味深い。

があることは十分に考えられる。この問題ついては，たんに「叙事詩の性格に起因する矛盾」として片づけるべきでなく，なぜこのような相反する叙述が生じたのかを，今後さらに検討する必要がある。

II.『チョラ＝バトゥル』の諸ヴァリアントの特徴とその分類

『チョラ＝バトゥル』には筆者が確認したかぎり，現在27編のテクストが存在する。しかし，前章で論じたように，これらのヴァリアントを網羅的に扱った研究は，これまでのところ皆無である。この章では，前章で見てきた先行研究における問題点を踏まえながら，それぞれのヴァリアントの特徴について，1. あらすじ・モチーフ，2. 登場人物・固有名詞，3. 歴史事象に関する描写，4. 現れる地名の4つの観点から具体的に論ずるとともに，それらの特徴に基づき，この作品の諸ヴァリアントの分類を行い，それらの地域的な特徴について論じたい。

1.『チョラ＝バトゥル』のテクストについて

筆者は，存在が確認される27編のテクストのうち20編の作品（17のテクストと3つのあらすじ）を入手した*17。それらのテクストは表1（次ページ）の通りである。なお，この表で用いた「版」とは，基本的に語り手の「民族」を表しているが，これはあくまでも便宜的なものである。では，表1に従って，簡単にそれぞれのテクストを説明しよう。

まず，①から⑪までがクリミア＝タタール版であるが，これらの採集地は，①がウズベキスタン，③から⑥までがクリミア半島，⑨がトルコ，⑩・⑪がルーマニアと様々である。ウズベキスタンやトルコ，ルーマニアなどでクリミア＝タタール版が採集されたのは，クリミア＝タタール人がこれらの地に離散したためである。1783年のクリム＝ハン国のロシア併合以降，多くのクリミア＝タタール人がオスマン帝国領内に移住し，クリミア戦争後の1856-60年には，およそ10万人ものクリミア＝タタール人がルーマニアのドブルジャ地方に移った[Ülküsa 1966: 21]。また第二次世界大戦中の1944年にはスターリンによって，20万人以上のクリミア＝タタール人が「敵性民族」として中央アジアに強制移住させられた。このような歴史的背景により，クリミア＝タタール人は広範な地域に居住していたのである。クリミア＝タタール版は，後述するように，採集された地域を問わず，あらすじやエピソードがそれぞれ類似している点が指摘できる。

カザンで出版されたテクストは筆者の知る限り，⑫を含めて3つである*18。⑫はカザン＝タタールの叙事詩として刊行され

---

*17　筆者が存在を確認したものの入手しえなかったのは，次の7つのヴァリアントである。カザン＝タタール版（Кыйссаи Чура батыр. Казан, 1884.），ユルダシュ叙述版（Аң журналы. 1916. 5 сан），ノガイ版（Ногай халық йырлары. М., 1959.），チュヴァシュ版，バシュコルト版（Башкорт халык ижады. Өфө, 1982.），ディヴァエフ採集版（Батырлар жыры 1. Алматы, 1939.），オミルベク採集版（ӘӨИ. 732-п. 10-дәптер. 1-16-б.）。

*18　⑫の他，二つのテクストは，カザン＝タタール版（Кыйссаи Чура батыр. Казан, 1884.），ユルダシュ叙述版（Аң журналы. 1916. 5 сан）。

表1　本稿で使用したヴァリアント一覧

テクスト名	「民族」名	語り手・採集者・編纂者など	文体	語数	言語
①『チョラバトゥル（Чорабатыр/Çoraьatır）*1』［*Кърымтатар*... 1991, Emel 1984］	クリミア＝タタール版	語り手，ベクマンベト＝クルマンベト。ザキル＝ベキロフ編纂	韻散混交文	約700行	クリミア＝タタール語
②『チョラ＝バトゥル　デスタン（Çora Batır Destani）』［Hasan Ortekin 1939］	クリミア＝タタール（カラス＝バザル）版	ハサン＝オルテキン編纂	韻散混交文	約600行	トルコ語
③『チョラ＝バトゥル（Чора Батыр）』［Radloff 1896］	クリミア＝タタール（カラス＝バザル）版	ラドロフ採集	韻散混交文	約500行	クリミア＝タタール語
④『チョラ＝バトゥル（Чора Батыр）』［Radloff 1896］	クリミア＝タタール（ブユク＝ホジャラル）版	ラドロフ採集	韻散混交文	約300行	クリミア＝タタール語
⑤『チョラ＝バトゥル（Чора Батыр）』［Radloff 1896］	クリミア＝タタール（バクチサライ）版	ラドロフ採集	散文	約30行	クリミア＝タタール語
⑥『チョラ＝バトゥル（Чора Батыр）（あらすじ）』［Янъы дюнья 1991］	クリミア＝タタール版				（クリミア＝タタール語）
⑦『チョラバトゥル（Çorabatır）』［Emel 30 1965］	クリミア＝タタール（カラス＝バザル，ケッフェ）版	語り手，アブドゥッラヒム＝エロリ（ブルガリア，シュムヌ生れ。祖父はカラス出身），ファフリ＝ベルチン（ケフェ近郊生れ）	韻散混交文	約170行	クリミア＝タタール語
⑧『タタール＝デスタン　チョラ＝バトゥル（Tatar Destanı Çorabatır）』［Bozkurt］	クリミア＝タタール版	フアト＝ボズクルト編纂。クリムのテクストを①や②に依拠して編集か？	韻文	約900行	トルコ語
⑨『ショラバトゥル（Şorabatır）』［Yüksel 1989］	クリミア＝タタール版	語り手，サドレッティン＝ギュレル（ルーマニア，コンスタンツァよりトルコ共和国ポラトゥルに移住）	韻散混交文	約250行	クリミア＝タタール語ポラトゥル方言
⑩『チョラ＝バトゥル（Čora Batîr）』［Is'haki 1935］	ドブルジャ＝タタール版	語り手，アブドゥッラ（ルーマニア，コンスタンツァ近郊のタタール人村生れ）。サアデット＝イスハキ編纂	韻散混交文	約600行	ドブルジャ＝タタール語
⑪『ショラ＝バトゥル（Şora Batır）』［Mahmut 1988］	ドブルジャ＝タタール版	ナドゥレト-エンベル＝マフムト編纂	韻散混交文	約1500行	ドブルジャ＝タタール語
⑫『チュラ＝バトゥル物語（Чура Батыр Хикәяте）』［*Татар*... 1984］	カザン＝タタール版	ベレジン採集		約470行	カザン＝タタール語
⑬『チョラ＝バトゥル　クリム＝ノガイ版（Çora Batır Kırım Nogay Rivayeti）（あらすじ）』［Inan 1968］	クリム＝ノガイ版	語り手，オスマノフ＝マゴメド・エフェンディ*2			（ノガイ語）
⑭『ナリクの息子ショラ＝バトゥルの物語（Бәҗ хикаяте Шора Батыр Нәрік җырылының киссасы）』［Диваев 1992］	カザフ（シュムケント）版	ディヴァエフ採集	韻散混交文	400行以上	カザフ語南部方言*3
⑮『ショラ＝バトゥル　ダスタン（Шора Батыр Дастан）』［*Шора*... 1993］	カザフ（ケンタウ）版	語り手，ポラトベク＝エルデウレトゥル*4。ケンタウで採集	韻文	約6300行	カザフ語
⑯『エル＝ショラ（Ер Шора）*5（あらすじ）』［Бердібай 1995］	カザフ版	語り手，ムサベク＝バイザコフ。アシルハン＝オスパンウル採集		約7000行	カザフ語
⑰『ナリク（Нәрік）』，『ショラ（Шора）*6』［*Батырлар*... 1989］	カザフ版	語り手，ムルン＝ジュラウ。ヌルマガンベトヴァとスディコフの編纂	韻散混交文	3000行以上	カザフ語
⑱『ナリク＝バトゥル（Нәрік Батыр）』［*Ертегілер*... 1989］		採集地，カザフ草原。アレクトロフ採集	散文	約200行	カザフ語
⑲『バトゥル＝ショラについての話（Батыр Шора туралы аңыз）』［Залесский 1991］	カザフ版	ザレスキーはアラル地方遠征隊に参加したポーランド人		約250行	カザフ語

*1　このヴァリアントは，ウズベキスタンで刊行されたキリル文字によるテクストとトルコで出版されたラテン文字によるテクストの二種類があるが，内容はほぼ同一のため一つのヴァリアントとして扱った。

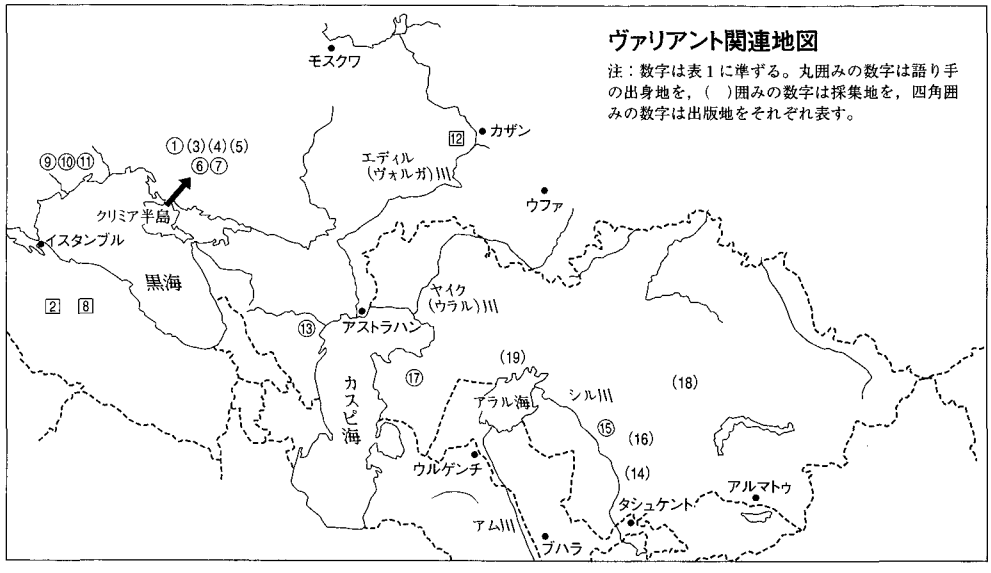
*2　クムク人の詩人・研究者。クムク，ノガイの作品を数多く採集した。

*3　現代ウズベク語などに近い語彙・表現が見られる。

*4　クズルオルダ生れ。シル川流域でジュル（叙事詩）を学ぶ。

*5　このテクストの語り手は著名なアクンであるムサベク＝バイザコフの語りをアシルハン＝オスパン・ウルが書き取ったものである。筆者はこのテクストは未見であるが，ベルディバエフの示したあらすじは1981年に書き取られたとされるポラトベク＝エルデウレト・ウルのヴァリアントと酷似している。ムサベクのヴァリアントとポラトベクのヴァリアントとの関係は不明であるが，なんらかの関係が考えられる。

*6　『ナリク』と『ショラ』はそれぞれ独立した作品として収録されているが，本稿では，内容から連続した一つの作品として扱う。



ているものの，これがカザンで採集されたものかは確かではない*19。カザンの防衛を描くこの作品が，当のカザンではほとんど刊行されていないのは，ソビエト時代の政策の影響とその名残であろう。しかし，カザン＝タタール人は長い間チョラを自らの民族的英雄と見なしており［Тынышпаев 1992：51］，この作品を『エディゲ』などとともにカザン＝タタールの代表的叙事詩と考えているため，今後，これまで刊行されなかったヴァリアントのさらに多くの刊行が期待される。

⑬の語り手オスマノフ（Османов）はクムク人であるが，叙事詩研究者としても有名な彼はノガイの作品も採集しており，またイナンはこの版をクリム＝ノガイ（Kırım Nogay）としているなど，クムクかノガイかの判断が困難であったため，便宜的に北カフカース版と表記した。なお筆者未見であるが，『ノガイ民族叙事詩集』［Ноғай халық йырлары. М., 1959］にはノガイ版の『チョラ＝バトゥル』が採録されている。このノガイ版はカザン版と酷似しているとの指摘がある［*Tamap*... 1984：347］。

⑭から⑲までは，西はマングスタウ（Маңғыстау）から東はシュムケント（Шымкент）までにおよぶ現在のカザフスタン共和国領内で，カザフ人から採集されたものであるため，カザフ版として扱っているが，あるエピソードのみが描かれてあったり，ストーリーが簡略化されていたりするために，あらすじやモチーフがすこぶる多様である。たとえば，⑱はチョラがクリミアに行って，名馬を手にし，敵との戦いを予感させたところで終わる。また⑭では，チョラはカザンでロシアを撃退したあ

*19　このヴァリアントは，カザン＝タタールの作品として「タタール民族作品集」に収録されているが，同書の解説には，このヴァリアントは音韻的にカザフ語あるいはノガイ語の影響を受けているとある。

と，凱旋帰国する。このように，ヴァリアントによってあらすじやモチーフが大きく異なる点が，カザフ版の特徴の一つと言えるであろう。

2．あらすじ，エピソード・モチーフの特徴

ここでは，『チョラ＝バトゥル』のあらすじやモチーフにおける各ヴァリアントの特徴を具体的に見ていくが，その前にまず，『チョラ＝バトゥル』がどのような内容であるかを理解するため，本稿末に挙げた参考資料で，3つの版のあらすじを参照いただきたい。これらによって，この作品の内容やエピソードが地域や「民族」によって様々に異なることが，まず理解できよう。これまで，ハサン＝オルテキンのあらすじ（②）は，パクソイや山内昌之らによって日本でも紹介されているが［Paksoy 1986；山内 1991］，その他のヴァリアントはほとんどまったく知られていないため，これらのあらすじを紹介することにも意義があるだろう。なお，これら3版のあらすじは，あくまでも読者の理解の一助のために挙げたものであり，これらが必ずしも『チョラ＝バトゥル』の代表的作品あるいは典型的作品であると筆者が考えているわけではないことをお断りしておきたい。

さて，『チョラ＝バトゥル』は，表2が示すように，大部分のヴァリアントがチョラの父ナリク*20の物語から始まる。ナリクに関するエピソードに欠けるヴァリアントは少なく，欠いているヴァリアント（⑤，⑦，⑨）もおそらく本来は，このエピソードが存在したものと推定される。

表2によれば，(d)，(e)，(h)，(i)，(j) などのモチーフはほとんどのヴァリアントに共通しており，『チョラ＝バトゥル』の基本的な骨格となるモチーフであるといえる。すなわち，父ナリクの妻メンリスルとの結婚，ハンなどによるメンリスルを得ようとする奸計，ナリク夫妻の新たなくにへの移動，チョラとアリビーとの戦い，チョラのカザン行とカザンでの戦いなどが『チョラ＝バトゥル』の基本的なあらすじを構成している。とくにチョラとアリビーによる「同胞同士」の決闘およびカザンでのチョラと「異教徒」の敵との戦いが，この作品の最大のクライマックスであるといえよう。中央ユーラシアの多くの英雄叙事詩では，主人公の勇士は，自分の「民族」の平和を脅かす「敵民族」と戦うとともに，しばしば「民族」の団結を乱す「同胞」と戦って勝利する。英雄叙事詩は，このような内外の敵との戦いによって，「民族の団結」と「敵民族に対する勝利」という理想化されたテーマを表現しているのである。

一方，(g)，(j)-1，(k)，(m)，(n) はクリミア版，北カフカース版，カザン版などカスピ海以西の版（以下，便宜的にカスピ海以西版と表記）に共通しているが，カスピ海以東には見られない。とくに (j)-1 や (k)，(m) といったカザン＝ハン国におけるエピソードがカスピ海以西の版では詳

*20　チョラの父の名には，表3（108ページ）が示すように，ナリク・ナラン・ナラクなど，いくつかのヴァリエーションがあるが，ここでは多く使われている「ナリク」の名称に統一する。また本稿では，その他の固有名詞についても，多く使われる名称を用いることとする。

表2　『チョラ＝バトゥル』の主なエピソード・モチーフ

	テクスト名（丸囲み数字は表1と対応）																		
エピソード・モチーフ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲
(a)ナリク，ハンの宮殿で異国からの隊商にその才能を認められる。	○	○						○											
(b)幼少のナリク，狩りに出たハンに拾われ養われる。												○	○						
(c)ナリク，妻を選ぶ旅に出る。	○	○	○	○				○		○	○			○			○	○	
(d)ハン（あるいはその息子），ナリクの妻を奪おうと策略を企てる。	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○			○	○	
(d)-1 ナリクの妻，「獅子の逸話」で奸計を切り抜ける。	○	○	○	○				○				○		○					
(d)-2 ナリク，ハン（あるいはその息子）を殺害する。	○	○	○	○				○		△	△	○	○				○	△	
(e)ナリク，故郷を離れ，新たなくにへ移動する。	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(f)ナリク，息子を忠実な下僕にちなんで，チョラと命名する。	○											○						○	
(g)チョラ，各地を廻る修行僧をもてなす。	○	○	○				○	○		○	○							△	
(h)チョラ，家族を侮辱したアリビーを戦ったすえに殺す。	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	△		
(i)チョラ，盟友と知り合い，行動をともにする。	○	○	○			○		○	△		○	○	○	○			○		
(j)チョラ，カザンへ行く。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
(j)-1 チョラ，弓矢を放ち，カザンの宮殿に矢を突き刺す。	○	○	○	○			○	○	○	○									
(k)チョラ，カザン＝ハンの娘からの褒美に満足せず，出陣を躊躇する。	○	○		○			○	○	△	○									
(l)困窮したナリク，チョラを訪ねて，カザンに来る。											○	○	○						
(m)敵の少女がチョラと結ばれ，息子を産む。チョラの息子がチョラと闘う。	△	○				○	○	○		○	○	○	○						
(n)チョラの守護霊である竜が現れる。				○	○				○	○							○		
(o)チョラ，敵と戦い，エディル川にて死ぬ。（悲劇的結末）	○	○		△		△	○	○	△	△	○	○	○						
(p)チョラ，敵を破って，無事故郷に帰還する。（大団円的結末）														○	○	○			○

注：○はそのエピソードが存在することを，△はそのエピソードと類似・関連するエピソードが存在することを表す。

細に描かれており，カザンでのエピソードに乏しいカスピ海以東の版とは対照的である。また，多くのカスピ海以西の版では，カザンでのエピソードが大きな割合を占めており，カザンにおける出来事への関心の高さが示されている。

(b) および (l) は，他の版には見られない，ノガイ版やカザン版に固有のエピソードである。また，(f) や (n) のように必ずしも地域に関係なく共通するモチーフもある。これらのエピソード・モチーフは，叙事詩の特徴を検討する上で興味深い点であ

表3 『チョラ＝バトゥル』の主な登場人物

	主人公	父	母	妹	馬	敵の勇士	盟友
①	Çora	Narik	Menli Sulu		Tasmalı ker	Ali bey	Qılıçaq
②	Çora	Narik	Menli Aru	Kanikay	Tasmalı Ker	Ali bey	Kolunçak
③	Çora	Närik	Mängli-Aru-Sılu	Kanıkäi	Tasmaly Kär	Äli bi	Kulunçak
④	Çora	Närik	Muangli-Sılu-Aru	Sılu-Bäk	Tasmalı kär	Äli bi	
⑤	Çora	Karıp jigir					
⑥	Çora	Narik	Mensulu	Djanike		Alibey	
⑦	Çora	Narık	Meslu		Tasmalıker	Ali Biy	Konşak
⑧	Çora	Malik bey	Bengü hanım	Kanıkay	Tasmalı kır	Ali bey	Kolunçak
⑨	Şora			Gani Mesru		Ali Bey	
⑩	Çora	Narïk		Bayan Sïlu	Tasma gäri	Ali bäy	
⑪	Şora	Narık		Aysılu	Tasmager	Ali bey	Kulınşak
⑫	Çura	Narang	Minglesılu	Aysılu	Karagir	Gali bi	Kolınçak
⑬	Çora	Narık			Karagir atı	Ali Bey	Kolunçak
⑭	Şora	Närik	Mengli sulu	Şirın	Aktanker		Qulınşaq
⑮	Şora	Närikbay	Qulqanıs		Şubar at	Älibi	Er Tasır
⑯	Şora	Närik	Qulqanıs		Şubar at	Älibi	
⑰	Şora	Närik	Mengdi aru		Taspaker	Älibi	Qulınşaq
⑱	Şora	Närik	Mengdisulu		Taspager		Qulınşaq
⑲	Şora	Nurek					

るといえよう。

『チョラ＝バトゥル』のあらすじにおけるもっとも大きな特徴は，ヴァリアントによって，その結末が非常に大きく異なることである。すなわち『チョラ＝バトゥル』には，チョラの死をもって敗北し，悲劇的に終わる結末と勝利の末に平安をもたらし無事生還する結末とが存在するのである。エピソード・モチーフ（p），つまりチョラが死なずに，帰還するというエピソードは，カスピ海以東に伝わるカザフ版のみに見られ，それ以外の版には見られない。カザフ版にもチョラが死んで終わる悲劇的な結末はあるが，カスピ海以西のほとんどのヴァリアントに見られる，チョラがエディル（ヴォルガ）川で死ぬという結末のヴァリアントはない。またカザフ版には⑰のようにチョラが超自然的な最期を遂げるものもある。このように，カスピ海以西の版はほとんどあらすじが似通っているが，カザフ版はあらすじが多様であることが指摘できる。以上のごとく，あらすじやエピソードから考えると，『チョラ＝バトゥル』の版はカスピ海を境にして，東西に大きく二分できることがわかる。

3．登場人物および作品に現れる固有名詞について

次に登場人物について表3を参考に見てみよう。主人公（チョラ）と父（ナリク），母（メンリスル），主人公の家族を侮辱し殺害された勇士（アリビー），および主人公の盟友（コルンチャク）については，表記上の若干の相違はあるものの，ほとんど一致している。このことは，先に述べた『チョラ＝バトゥル』のほとんどのヴァリアントに共通するエピソードとならんで，これらの登場人物がこの作品に欠かすこと

表4　ナリクの故郷・移動先，およびその地域のハンと敵民族

	父の故郷	故郷のハン	父の移動先	カザン＝ハン	敵民族
①			Kırım, Kara		Rus
②		Canbek	Kırım, Köküşlü Dama	Çiğ(f)ali han	Moskof
③			Kırım, Kökuşlu	Çığalı	Kazak
④		Canıbak	Kökuşulu-Tama	Çığalı Kan	Mäsku
⑤					
⑥					Rus
⑦					Orus/Kazak
⑧		Canbek Han	Kırım, Gökdam	Çağan	Rus/Moskova
⑨					Kazak/Rus
⑩	Ögüz ülı tana				Orus/Rus
⑪			Kökışlı Tama		(敵)
⑫	Dagstan	Kazıy bi	Hacitarhan, Kırım	Şagali han	Urıs
⑬	Dağıstan	Kadı Bey Mirza	Astrahan	Şagalı	Rus/Moskov
⑭	Qazan		Örgäniç		Orıs
⑮	Qazan, Tama	Älimhan	Noğaylı-Türikmen	Älimhan	Qalmaq
⑯	Qazan	Älimhan	Noğaylı-Türikmen	Älimhan	Qalmaq
⑰	Qazan		Noğaylı		Qalmaq
⑱					Qalmaq
⑲	Qazan				(敵)

のできない基盤をなしていることを表している。妹の名が一定でないのは，作品における妹の役割が補佐的で，ヴァリアントによって妹の関与するモチーフが異なり，あらすじにおける位置がさほど重要でないためであろう。なお，その他の登場人物はエピソードが共通していても，名称が異なっていたりする場合が多い。

ちなみに「チョラ（чора）」とは本来，「ある人の子孫」や「戦士」，「奴隷」などを表すテュルク系の言葉である［Сыздыкова 1994：17-20；*Манас*... 1995：337］。表2のエピソード（f）にあるように，ナリクの忠実な奴隷にちなんでチョラと名付けられたと説明されることもあり，実在のチュラ＝ナリコフとの関係を差し置いても，本来の「チョラ」の意味が叙事詩の主人公の特徴を表していることは興味深い。

さて，中央ユーラシア＝テュルク系の英雄叙事詩において，主人公の馬は不可欠な存在であり，主人公の片腕として陰に陽に彼を助ける。『チョラ＝バトゥル』でも馬は重要な役割を果たす。その馬の名称はほぼ共通しており，この作品の主要な存在の一つであることを示している。多くのヴァリアントでは，旅する老人（修行僧）が自分の仔馬の首に首輪をかけて，チョラに与えたというエピソードがあり，そのためこの馬は「タスマル（tasmalı, 首輪のついた）ケル（ker, 栗毛馬）」と名付けられたと説明されている。

表4に示したように，ナリクが故郷で仕えていたハンは，クリミア版に見られる「ジャンベク（Canbek）」に類似する系統と北カフカース版・カザン版の「カズィ＝ビー（Казый би）」の系統との二系統がある。「カズィ＝ビー」の名は，ノガイ＝オルダの著名な支配者カズ＝ムルザ（Казы-

мурза）を彷彿とさせる。ノガイ＝オルダは，15世紀前半にエディゲやその息子ヌラッディンによって興された，キプチャク＝ハン国の後継国家である。その領域は，エディル（ヴォルガ）川とヤイク（ウラル）川流域，カスピ海北岸を中心に，北はカザン，南西はアラル海北岸におよび，15世紀から16世紀に興隆した。16世紀後半，ノガイ＝オルダが分裂した結果，エディル川右岸やカラバルダ，アゾフに小ノガイという集団が形成されたが，この集団を率いた人物がカズ＝ムルザである。エディゲ（Едиге）やオラク（Орак），ママイ（Мамай）などノガイの支配者を主人公とした叙事詩は，かつてのノガイ＝オルダの領域あるいはその周辺の地に伝わっているが，カズの名前もまた口頭伝承においてしばしば見られるのである。そのため，『チョラ＝バトゥル』に現れるカズィ＝ビーとカズとの何らかの関係が考えられるが，この点についての具体的な検討は今後の課題としたい。

カザン＝ハンの名称については，具体的な名称で現れる場合，ほぼ共通した名称が使われている。このことに関しては次項で触れることにしよう。

4．歴史的事象に関する描写

『チョラ＝バトゥル』では，ほとんどすべてのヴァリアントで敵民族がカザンを攻撃するが，その敵民族は，カスピ海以西版ではロシア*21であるのにたいし，カザフ版ではほとんどがカルマクである（表4）。

カスピ海以西版では，上述のように，カザンにおけるエピソードが大きな位置を占め，ロシアのカザン侵攻はこの作品のクライマックスとなっている。チョラ＝バトゥルとチュラ＝ナリコフとの問題については既述したが，ここでは，いくつかのヴァリアントで共通しているカザン＝ハンの名称について触れておきたい。この共通するカザン＝ハンの名称は，カザン＝ハン国末期に実在したカザン＝ハン，シィガリ（シャー＝アリ）と一致している。シィガリ＝ハンは16世紀前半，カザン＝ハン国で三度カザン＝ハンの位に就いた人物で，「モスクワの傀儡」であったとされ，カザンにおける覇権をめぐりクリミア派と対立した。既述のように，チュラ＝ナリコフはシィガリ＝ハンに仕えていたが，このことは多くのカスピ海以西版に描かれていることとも一致する。シィガリ＝ハンについても，叙事詩における像と史料における像との相違という問題がある。しかし，チョラがシィガリ＝ハンに仕えていたということは，叙事詩にも史料にも共通しているのである。

カザフ版にはカザンでのエピソードを描いたものは少なく，しかもその描写が抽象的であることなど，カスピ海以西の版とは対照的である。さらにカザンに関していうと，カザフ版にはカルマクがカザンを攻撃するモチーフがある。もちろん，カルマクがカザンに侵攻したことは史実ではない。しかしここからは，カザフ版が伝えられた地域にとって重要な問題であったのは，ロシアとの戦いではなく，カルマクとの戦い

*21　表4に見られる казак は，カザフ人ではなく「コサック」を意味する。そのため，казак はロシアと同義として捉えられている［Is'haki 1935: 46］。

であったため，本来の敵民族ロシアがカルマクに替わったことを読みとるべきであろう。実際，敵民族をカルマクとするヴァリアントは，シル川流域やアラル海周辺など，17世紀から18世紀中葉にかけてカルマクの侵攻が苛酷であった地域に伝えられている。また，カザフ版にも，ロシアがカザンを攻撃するヴァリアント（⑭）が存在するが，このヴァリアントでは，チョラがロシアを破って，ウルゲンチに帰郷するなど，他のロシアを敵とするヴァリアントとは大きくかけ離れた内容となっている。

このように，カスピ海以西の版がほとんど同一のあらすじである上，カザンでの活動に関する描写が豊かで，とくにクリミア版では「ロシアのカザン攻略」という具体的な歴史的事件が描かれているのにたいして，カザフ版はあらすじが多様で，「カルマクとの戦い」という抽象的な歴史的イメージが謡われているなど，『チョラ＝バトゥル』に託されたメッセージが地域によって異なることがわかる。

5．作品に現れる地名

『チョラ＝バトゥル』は，いずれのヴァリアントもカザンを舞台としていることはこれまで述べたとおりである。しかし，『チョラ＝バトゥル』に登場する地域はヴァリアントによって様々に異なる。この項では，ナリクおよびチョラの移動の行程をもとに，それぞれのヴァリアントに描かれる地域について見てみたい。

表3が示すように，ほとんどのクリミアのヴァリアントでは，ナリクの出身についてはとくに述べられていない。ナリクは，いずこよりかクリミアの「キョクシュリ＝タマ」なる集団のもとにやってきたというのが，ほとんどのクリミア版の設定である。また，②や③，⑧では，ナリクはエディル川やヤイク川の流域で妻を娶っている。故郷をあとにしたナリクはクリミアに留まり，主人公のチョラはその地からカザンに向かう。つまり，クリミア版のほとんどが，キョクシュリ＝タマが居住するクリミアの地とカザン，エディル川周辺を舞台としているのである。

カザン版と北カフカース版では，ナリクはダゲスタンで育ったとしている。その後，ナリクはダゲスタンを後にして，アストラハンに移動する。カザン版では，ナリクはアストラハンからさらにクリミアに移動する。チョラは，エディル川周辺にその名を轟かせたあと，その地で妻を娶る。そして，チョラはクリミアのアリビーを殺害したために，アストラハンあるいはクリミアからカザンへと向かうのである。このように，カザン版と北カフカース版では，クリミアやカザン，エディル川周辺に加えて，他の版には見られないダゲスタン・アストラハンといったカスピ海沿岸の地域が舞台の一つとして現れており，これらの版に固有の特徴となっている。これは，この作品が伝わった地域・「民族」に定着する上で，変容したためであると考えられる。カザン版と北カフカース版は，敵民族をロシアとしたり，カザン＝ハンの具体的な名を示したりするなどクリミア版との共通性をもつが，カザフ版にも見られるような「地域的変容」を示すという独特の特徴を有しているといえよう。

カザフ版では，ほとんどがナリクの故郷

をカザンとしているものの，その後ナリクがカザンを後にして移り住んだ地域は，ウルゲンチや「ノガイ＝トゥルクメンの地（Ноғайлы түрікмен жері）」，「ノガイのくに（Ноғайлы）」とそれぞれ多様である。カザフ版も，カザン版や北カフカース版同様，それぞれの地域に定着する過程でこれらの地域が描かれるようになったのだろう。ちなみに，カザフ版や北カフカース版，カザン版に固有の地名の多くは，ノガイ＝オルダの勢力がおよんだ地域と重なる。また，ナリクが妻を探したり，チョラが盟友コルンチャクと出会ったりする場所はしばしば「ノガイのくに」である。なおカザフには，ノガイ＝オルダの英雄たちを謡った「ノガイ大系 ногайский цикл」といわれる叙事詩群があり，『チョラ＝バトゥル』も「ノガイ大系」に属すると考えられているが，カザフ版や北カフカース版の形成と伝播にノガイ＝オルダが何らかの役割を果たしたことが考えられることを指摘しておこう［坂井 1997：56-57］。

ところで，カザフを構成する「部族連合」の一つである小ジュズに「タマ（тама）」という下位集団があるが，口伝される系譜によると，この集団の先祖にナリクとチョラがいる［*Қазақ шежіресі*... 1994；Толыбеков 1992；Маданов 1994］。タマはチョラより三代前まで遡る人物として伝えられている［Маданов 1994：101］。また，叙事詩（⑰）でもタマはナリクの祖父として描かれている［*Батырлар*... 1989：320］。すでに述べたように，カザン＝タタールでは，チョラは彼らの祖先の一人と考えられているが，カザフのタマの人々もまたチョラを自らの祖先と考えているのである。また，『チョラ＝バトゥル』のクリミア版においても，チョラはクリミアの「キョクシュリ＝タマ」で成長したと謡われており，チョラと「タマ」との間に深い関係があることは明確である。テュルク系の英雄叙事詩では，主人公の勇士はしばしば，ある特定の「部族」の始祖あるいは英雄として描かれている。たとえば，『アルパミシュ』ではコンギラト（Құңғирот）の，『コブランドゥ＝バトゥル（Кобыланды батыр）』ではクプシャク（Қышшақ）の，『エル＝コクシェ（Ер Көкше）』ではウァク（Уақ）の勇士が，それぞれの「部族」の英雄として描かれている。そのため，これらの作品とそこに描かれる「部族」との関係についての論考がこれまでも行われている。これらの作品と同様に，『チョラ＝バトゥル』と「タマ」との関係も，今後，十分検討されるべき課題である。共通する部族を分析することは，民族の成立や民族史についての論考に寄与する［宇山 1999：90］が，「タマ」についての考察も，カザフやカザン＝タタール，クリミア＝タタールの民族形成に関する論考に貢献するであろう。

6.『チョラ＝バトゥル』の分類

ある叙事詩作品を体系的に研究する際には，客観的な特徴に基づいた分類が必要である。『チョラ＝バトゥル』のように広域に伝わり，ヴァリアントが多く，また内容も多彩である作品を研究するためには，なおさらのことである。しかしながら『チョラ＝バトゥル』の分類は先行研究ではほとんどなされておらず，イナンが簡単に論じ

ているに過ぎない。イナンは『チョラ＝バトゥル』を，(a) クリム版*22，(b) カザフ＝キルギス版*23，(c) バシュコルト版*24の3つに分類している［Inan 1968: 76-85］。この分類は，本稿で「版」として表したような，採集された「地域」および語り手の帰属する「民族」による分類である。このような分類は機械的で容易にできるが，内容やモチーフが考慮されず，その「版」の特長がわかりにくい。また，このイナンによる分類はわずか5つのテクストによる分類である上，カザン版や北カフカース版などは考慮されておらず，分類に用いたヴァリアントが少ないという問題点が挙げられる。もっとも，この研究がなされたのは，『チョラ＝バトゥル』のテクストが少なく，この作品についての体系的な情報がほとんど入手し得なかった時代のことであるため，仕方のないことである。しかし，数多くのテクストが入手可能な現在，それらを考慮した分類が必要である。

それでは，これまで論じてきた4つのポイントに基づいて，本稿で扱ったヴァリアントを分類してみよう。まず，あらすじやエピソードの相違，物語の結末などの点から，『チョラ＝バトゥル』はカスピ海を境にして東西二つに分類することができる。そしてさらに，カスピ海以西の版は，主人公が活動した地域の相違やエピソードや固有名詞などから，クリミアおよびドブルジャなど黒海周辺に伝わるものとエディル川流域および北カフカースに伝わるものとに分けることができる。以上を整理してみると次のようになる。

I.（1）クリミア・ドブルジャ
　（2）エディル（ヴォルガ）川流域・北カフカース
II. カザフ草原・シル川流域

もっとも，この分類は現在筆者が知り得たヴァリアントに基づいたものであるため，未見のヴァリアントを考慮した場合，違った結論が得られる可能性もある。しかし，この作品の一般的な特徴を考えると，基本的にこのような分類の妥当性は否定されることはないだろう。

7.『チョラ＝バトゥル』に込められた歴史の記憶

上述のように，『チョラ＝バトゥル』の諸ヴァリアントは多くの共通点をもちながらも，地域によって様々な相違点があることが明らかになった。『チョラ＝バトゥル』は上記のように地域的に大きくふたつに分類できるが，この分類における際立った相違点は，敵民族（ロシアあるいはカルマク）と物語の結末（敵に敗れての死あるいは敵を破っての帰還）にある。敵民族および物語の結末という，作品を特徴づける要素が異なるということに地域的な特徴が表れていると考えられ，きわめて注目に値するものといえよう。これらの地域的な違いは一体何に由来するのであろうか。

---

*22　イナンはオスマノフによるノガイ版（表1⑬）もクリム版に数えている。
*23　イナンがカザフ版に取り上げているのは，ディヴァエフの採集した，表1⑭のテクストである。
*24　同版のテクストは，イナンがこの分類をした当時にはまだ出版されておらず，彼は同版の存在を指摘するにとどまっている。

まず，分類Ⅰの地域（クリミア，エディル河流域・北カフカース）はカザン陥落以降，ロシア支配を受けた，あるいはロシアとの激しい抗争が長く続いた地域であることが指摘できる。1552年のカザン陥落に引き続いて，1556年にはアストラハンがロシアに占領されるなど，エディル川の中・下流域はロシアの支配下に置かれるようになった。また，クリミアやカフカースは，近代においてロシアとオスマン帝国の抗争の舞台となり，1783年のロシアによるクリミア併合や18世紀以降漸次的に行われたカフカース征服の過程で，ロシアへの激しい抵抗が行われた地域であった。これらの地域ではロシアの征服以後も辛苦に喘ぎ，たとえばクリミア＝タタール人はとくに厳しい迫害を受け，前述のようにオスマン帝国領内へと移住するほどであった。そのような状況下で，チョラがロシアと勇敢に戦う様が語り継がれてきた。チョラはおそらく彼らにとって，単なる物語の主人公ではなく，特別な英雄的存在であったことであろう。独立期のクリミアで，「おまえのチョラ＝バトゥルはどこにいる？」と若者らに謡われながら，チョラが「偉大なる英雄」として扱われていたのは，まさにこうした流れによるものなのである［Inan 1968：77］。また同時に，チョラがロシアとの戦いで命を落とし，その後カザンの人々がロシアの支配を受けるという物語の結末に，人々は自らの未来を照らし合わせていたかもしれない。

次に，敵がカルマクとして伝えられている分類Ⅱの地域（カザフ草原・シル川流域）について見てみよう。この地域は17-18世紀にかけてカルマクの猛攻を受けた地域である。とくに「アクタバン＝シュブルンドゥ（Ақтабан шұбырынды）」といわれる18世紀前半の攻撃は苛烈を極めた。たとえば，このカルマクとの抗争によって「カザフ人意識」が強化されたと考えられるように，この地域の民族形成にも大きな影響を与えた。カルマクの中央アジアに残した痕跡の大きさは，この地域に伝わる英雄叙事詩の多くが主人公の敵をカルマクとしていることからもわかる。分類Ⅱで，ロシアのカザン侵攻ではなく，カルマクとの戦いが謡われているのは，こうした歴史的状況がその背景にあったものと考えられるのである。その結果，カザンを巡る戦いという歴史的事件に関する情報はかなり薄まってしまったが，カルマクとの戦いという「歴史のイメージ」を伝える働きを担うこととなった。そしてその一方で，カルマクとの戦いについての出来事の記憶の保持と伝承は，「歴史叙事詩」と分類されることのある，アブライ＝ハンなどにまつわる数多くの叙事詩がその任を担ったのである［坂井 1995］。

カザン攻略以後，ロシアは南方および東方へと拡張を続け，広大な領域を支配するに至った。そうした意味からも，カザンを巡る戦いはユーラシア大陸の歴史において画期的な出来事であった。そして，その出来事の記憶は「征服された」人々に様々な形で語り継がれることとなった。ある出来事を描いた同一作品の地域的な相違は，その地域の「歴史観」の違いにあるといえよう。叙事詩にはまさにそうした「民族」あるいは「地域」の「歴史観」が映し出されているのである。

おわりに

以上，本稿で考察したことをまとめると次のようになる。

まず，先行研究については，旧ソ連の研究者が「ロシア支配下」で「民族文化」の研究に大きな制約を受けていたために，チョラとロシアとの敵対関係を否定しようとする傾向があったこと，欧米やトルコの研究者がこの作品の多様性を考慮せず，反ロシア的な性格にのみ重点を置いていたことなどが挙げられる。つまり，先行研究全体に，この作品のヴァリアントの全体を視野に入れて議論するという姿勢が欠けており，任意のヴァリアントのみを取り上げて，この作品について断片的に論じることが多かったのである。また，この作品に史料的価値があるかどうかについても，積極的にその価値を主張する欧米・トルコ・日本の研究者とそれを否定しようとする旧ソ連の研究者との間で大きな隔たりがあることが確認された。

次に，『チョラ＝バトゥル』とその諸ヴァリアントの特徴を明らかにし，それらをⅠ．（1）クリミア・ドブルジャ，（2）エディル川流域・北カフカース，Ⅱ．カザフ草原・シル川流域と分類した結果，次のようなことが指摘できる。

まず，『チョラ＝バトゥル』の基本的なモチーフや登場人物はどのヴァリアントにもほとんど共通しており，シル川流域からドブルジャまでの広範囲のテュルク系民族に共通の文化遺産として伝えられているものの，物語の結末や敵民族についてはカスピ海を挟み東西で大きく異なることや作品の伝えられている地域の特徴がそれぞれのヴァリアントに顕著に現れていること，さらにチョラと「タマ」という集団との関係が深いことが示されていることなどである。

そして，歴史の記憶を後世に伝える役割を担う叙事詩作品の一つである『チョラ＝バトゥル』に，どのような歴史が投影されているかという問題については次のようなことが指摘できる。まず，分類Ⅰの地域（クリミア・ドブルジャ，エディル川流域・北カフカース）においては，16世紀前半のロシアによるカザン侵攻とそれを防禦しようとするタタールの様子が詳細に描かれており，それがこの地域のひとびとに代々伝えられてきた。つまり，クリミアやドブルジャなどでは，彼らのその後の歴史にロシアが大きく関係したために，ロシアとの関係史において重要な事件であった，カザンを巡るロシアとの攻防が詳しく伝えられてきたのである。それにたいして分類Ⅱでは，カザンを侵攻したのはロシアではなく，カルマクとなっている。これは，カスピ海以東，カザフ草原・シル川流域へのカルマクの攻撃が苛烈であり，これに先立つロシアのカザン侵攻よりも重要な問題であったためであると考えられる。このように叙事詩は歴史を伝え，「民族」あるいは「地域」の「歴史観」を表しているが，そこから歴史を読みとる場合，それが「具体的な歴史事件」を伝えているのか，「抽象的な歴史的イメージ」を伝えているのかに十分注意した上で，利用せねばならない。この点から先行研究を顧みると，『チョラ＝バトゥル』が実証的な史料となりうるというパクソイらの考えは，カスピ海以西版，とくにクリミア版においては妥当な見解であったといえる。たとえば，カザン＝ハン国の有

力者チュラ＝ナリコフの特徴，あるいはカザン＝ハン国の末期における状況を考える上で，これらの版は有益な「史料」となりえるだろう。また筆者は，『チョラ＝バトゥル』のクリミア版では，チョラとアリビーとの戦いに大きな比重が置かれていることから，ムスリム対キリスト教徒あるいはタタール対ロシアという構図と同様に，クリミアとカザンとの争いの歴史を積極的に読みとるべきであると考えるが，その具体的な作業は今後の課題としたい。本稿で明らかになったように，同一の叙事詩であっても，伝えられる地域や「民族」によって，それが果たす役割や伝える記憶は多様である。中央ユーラシア地域においては，口頭伝承の果たした役割がとくに大きかったため，歴史の記憶が織り込まれた叙事詩は，この地域や「民族」の「歴史観」を浮き上がらせるためにも不可欠な題材なのである。このような視点による叙事詩を利用した研究は，地域研究に少なからず貢献するであろう。

参考資料　『チョラ＝バトゥル』のあらすじ

①クリミア＝タタール版（表１①）

勇士ナリクは，ある日ハンから褒美として馬と妻となる娘を選ぶよう命ぜられた。ナリクは，将来名馬になる小馬を選んだ。また娘を探していると，白髭の老人に出会い，彼の薦めに従って，ナリクはメンリスルという娘を選んだ。

ある晩，ハンの王子はチョラに使いを命じて，その留守にメンリスルを奪う計略を立てた。しかし，妻はこの謀略に気がつき，ナリクに出かけるふりをして隠れているように頼んだ。メンリスルはやってきた王子に次の物語を語った。「ある日，馬飼いが獅子に出くわした。彼は獅子に命乞いをして，身代わりに肥えた獣を贈ったが，ライオンはその獣にすでに歯形があるのを認め，受け取らなかった」と。「獅子は，すでに歯形がついたものは決して食べないものです」とメンリスルは諭した。しかし王子はメンリスルに襲いかかったため，隠れていたナリクは王子の首を切り落とした。

ハンは，行方不明になった王子についてナリクに質した。ナリクが殺害を認めたため，ハンは「ここより立ち去れ」と命じた。そしてナリクと妻はコクシェリ＝タマに移っていった。その道中，妻は子を産んだ。その子はチョラと名付けられた。彼は友人クルンチャク＝バトゥルとともに読み書きを学び，牛飼いとなった。

ある日，旅の老人がチョラの村を訪ねてきた。誰も老人をもてなそうとはしなかったが，チョラだけは自分の牛を屠り歓迎した。老人はチョラに一頭の小馬を授けた。その馬はタスマルキョルと名付けられた。

またある日，カラというハンがチョラに「おまえは何人のバトゥルに価するのか」と尋ねた。「私は私１人に価します」とチョラ。カラ＝ハンは「余のもとには100人にも価するバトゥルがいる」というと，チョラは「私１人に価する勇士はこのクリミアに果たしているでしょうか」と言って去った。カラ＝ハンは40人のバトゥルにチョラを襲わせたが，チョラは彼らを馬の尻尾に結び付けてしまった。

カラ＝ハンにはアリベイという勇士が仕えていて，40人の勇士にかわってチョラに挑んだ。一騎打ちの末，チョラはアリベイを破った。チョラは母に「私はアリベイを殺しました。ここにはいられません。カザンに行こうと思います」と言った。母はチョラを引き止めたが，チョラはクルンチャクとともにこの地を離れ，カザンに向かった。

カザンへの道中，チョラらはあるハンに客として招かれた。「おまえは矢をどこまで飛ばすことができるか」と尋ねるハンに，チョラは「カザンの町まで飛ばしましょう」と答えて，矢を射た。

チョラとクルンチャクはこの地をあとにして，カザンのハンを訪ねた。ハンは彼らをもてなした。そのころカザンでは大理石に刺さった矢を勇士たちが引き抜こうとしていたが，誰も抜くことができずにいた。だが，チョラは容易にその矢を引き抜いた。これを見たハンは「カザンを敵

が襲撃しても，チョラがいれば大丈夫だ」と喜んだ。

ハンにはサルハヌムという娘がいた。彼女はカザンの40人の勇士には褒美を授けたが，チョラには空のフェルトの袋を与え，クルンチャクには何も与えなかった。チョラはこの褒美に不満で，その袋を馬糞の中に捨てた。

敵のカザン攻撃が始まった。勇士たちは七日七晩戦ったが，敵を追い払うことができずにいた。戦場にチョラの姿はなかった。サルハヌムは，チョラが褒美に不満であることを知り，捨てられた袋に名刀を入れてチョラに与えた。チョラは満足して，馬に乗り戦場に向かった。チョラはクルンチャクとともに七日七晩戦った末，敵の勇士を矢で射抜き，勝利した。

バトゥルたちはカザン＝ハンの宮殿に戻った。サルハヌムは，真の勇士であるチョラのもとに嫁いだ。しかしその後二人は別れ，サルハヌムは敵の側に寝返った。それから15-20年が経った。ある日，チョラ＝バトゥルは敵の勇敢なバトゥルと戦う。チョラは，その勇士がサルハヌムから生まれた自分の息子であることに気付いた。一騎打ちの末，チョラの息子はチョラを川に投げ飛ばした。そして，チョラが川に沈んだあと，カザンはロシアのツァーリの手に落ちたのであった。

②カザン＝タタール版（表１⑫）

ダゲスタンにカズィ＝ビーというミルザ（支配者）がいた。ある日，狩に出かけたカズィ＝ビーは男の子に会った。その子は敵の攻撃から逃げて森に隠れていたのであった。カズィ＝ビーはその子を連れ帰り，養った。その子はナランと名付けられ，勇敢な勇士になった。カズィ＝ビーはこのナラン＝バトゥルにミンスルという美しい娘を与えた。

ある日，カズィ＝ビーの弟カンミルザはナランの妻ミンスルに一目惚れし，ナランの留守にミンスルを訪ねた。ミンスルは彼を受け入れなかった。カンミルザは彼女を追いまわした。ナランはこれを知って，カンミルザを刀で斬りつけて殺した。カズィ＝ビーはナランに「ここから立ち去れ」と命じた。そのため，ナランはミンスルとアストラハンの町のアクチャ＝スルタンのくにに移った。

アクチャ＝スルタンはナランの妻を見て，恋に落ちた。ナラン＝バトゥルを兵役に服させ，その隙を狙ってミンスルのもとに来た。彼女は「狼の食べ残しを獅子が食べることはふさわしいことでしょうか」と言った。このスルタンは後悔して，出ていった。出かけたふりをして隠れていたナランはこのスルタンを殺して，妻と共に逃げた。道中，ミンスルは子供を産んだ。そして彼らはクリム（クリミア）に着いた。

チュラはそこで育ち，５-６歳になった。チュラ＝バトゥルは名馬に乗って，鎧甲冑を身につけ，イデル川（ヴォルガ川）に向かった。チュラはイデル川で溺れていた若い女を救い出した。彼女の夫コルンチャクは「彼女はあなたにこそふさわしい」と妻をチュラに嫁がせた。チュラは妹とコルンチャクとの婚約を取り決めた。チュラは妻を連れて，クルムに戻った。

さて，チュラがイデルにいるころ，クルムのハン，アクタシュの家来ガリ＝ビーがチュラの父ナランを痛めつけ，名馬カラギルを奪っていった。戻ったチュラ＝バトゥルは留守中のガリ＝ビーの暴虐を知った。怒ったチュラ＝バトゥルはガリ＝ビーの頭を切り落とし，カラギルを取り返した。

そしてガリ＝ビーを殺したチュラはカザンへ向かった。チュラはコルンチャク＝バトゥルをカザンに呼びよせ，シャガリ＝ハンのもとでカザンを狙うロシアとの戦いに備えた。

チュラがカザンでロシアと戦っているころ，クルムにいる父ナラン＝バトゥルのもとにガリ＝ビーの妹がやってきて，ナランの家畜を奪い去ったため，ナランは貧困に喘いだ。ナランはカザンにいる息子チュラのもとにきた。チュラはナランに多くの金を与えた。またシャガリ＝ハンはナランをもてなし，家畜や衣服を与え，クルムに帰した。

ロシアでは占星術師がチュラの死について占っていた。占星術師は「チュラに美しい少女を送って彼の子を宿させなさい。その子がチュラを殺すであろう」と告げた。将軍たちは「チュラの子供を宿して，ここに戻ってくるのだ」と命じて，美しい娘を送った。チュラはこの娘がたいへん気に入った。やがて彼女は妊娠した。そして娘は自分の国に逃げ帰り，男の子を産んだ。

ある日，ハンの娘サルカニはバトゥルたちに贈り物を贈った。チュラには金の箱を一つ与えたが，チュラはこれに不満で，それを捨ててしまった。そしてチュラは戦いに行くのを止め，寝ていた。サルカニはチュラに「箱の中を見てください」といった。チュラは箱を拾って見てみると，「クク＝チュブク（青い竿）」という刀が入っていた。チュラはサルカニを許して，出撃した。チュラは敵を倒して追いやった。シャガリ＝ハンとサルカニはこの知らせを聞いてたいへんよろこんだ。

ある日，チュラは，ロシアの娘が産んだ自分の息子と戦った。息子との戦いは長く続き，疲弊した馬はついにイデル川に沈み，チュラ＝バトゥルは溺れて死んだ。

③カザフ版（表１⑰）

カザンのハン，ナリクには５人の妻がいたが，子宝に恵まれなかった。ナリクは，もう１人妻を娶ろうと考え，家来のアリビーに娘たちを連れてこさせた。ハンは，ノガイ人の娘メンディを選んだ。アリビーをはじめとするビーたちは，ナリクを快く思っていなかったため，彼をカルマクの町に行かせて，抹殺しようとした。ナリクが黒い駿馬を連れて草原に出ると，あとから追ってきた妻メンディは彼に，「行くならば帰ってはこられないでしょう」といった。ナリクは出かけるのを取り止め，奸計を企てたアリビーの首を取った。そして，ナリクは下僕テルショラやメンディを連れて，仇敵オギズハンのくにに到着した。メンディの知恵によってナリクは，カザン＝ハンである素性を隠して滞在した。

オギズハンはメンディを横取りしようと，ナリクに馬で９カ月かかる遠い地に赴くよう命じた。ナリクの留守中，オギズはメンディに言い寄った。だがメンディはオギズハンにナリクの先祖について語り，ハンに抵抗した。旅立ったナリクは途中で引き返し，オギズハンを殺害した。そしてそこにいられなくなったことを知って，妻メンディと下僕テルショラを連れて逃げた。道中，メンディは男児を出産し，ショラと名付けた。

ショラは急速に成長した。ショラはノガイの勇士クルンシャク＝バトゥルと親友になった。ある日，カザンを異教徒が攻め取ったという知らせが入った。そこでカザンに向かった。カザンに向かうショラを殺そうと，オギズハンの子供メンディハンが道中に立ちはだかる。メンディハンにショラは自分の父ナリクの素性について語り，「私がカザンに行ったなら，雪ではなくて血を降らそう」とカザンにいく決意の程を語った。メンディハンは矢を射たが，ショラには当たらず，ショラに殺されたのであった。

ショラがカザンに着くと，カザンのアディルシェ＝ハンの娘ハンジャンを狙って，カルマク軍がカザンを包囲していた。しかし，ショラはこれを見事に追い払った。

ある日，カルマクのアクタシュ＝ハンは60人のビーにショラの駿馬タスパケルを奪うよう命じた。ショラは彼らを捕虜にし，アクタシュのくにを攻めた。そしてショラは，アディルシェ＝ハンの娘ハンジャンと結婚した。アディルシェはハンの座をショラに渡そうとしたが，ショラはこれを拒否した。その後も，ショラはバトゥルとしてクルンシャクとともに何度もカルマクと戦い，彼らを破った。

あるとき，ショラはクルンシャクに「もし，東からおまえのところに竜がやってきて，おまえを飲み込もうとしても，決して手向かうな」と言った。ある日，１匹の竜がクルンシャクのもとにきて，飲み込もうとしていた。そこでクルンシャクは腰の金剛の刀を引き抜き，切ろうとすると，竜はいなくなってしまった。クルンシャクが背後を振り返ってみると，地面が裂けて，大地がショラを飲み込んでしまった。音をたてて現れた竜はショラの守護霊（アルワク apyaq）だったのである。悲しみくれるクルンシャクとハンジャンはタスパケルを屠り，ショラに捧げたのであった。

参考文献

石戸谷重郎
1986「16世紀中葉におけるロシアとカザン」『奈良産業大学紀要』2：3-25。
宇山智彦
1999「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』2（1）：85-116。
坂井弘紀
1994「英雄叙事詩が伝える「ケネサルの反乱」」『イスラム世界』44：19-36。
1995「18世紀カザフのハン，アブライの生涯　英雄叙事詩を題材にして」東京外国語大学修士論文。
1997「カザフの英雄叙事詩にひそむ歴史『エル＝タルグン』の歴史背景に関する一考察」『内陸アジア史研究』12：47-61。
山内昌之
1991『ラディカル・ヒストリー』中公新書。
Алишев С. Х.

1995 *Казань и москва : межгосударственные отношения в* 15–16 *вв.* Казань : Казань татарское книжное издательство.

Ахметов С.

1992 *Фольклорлық терминлердің қысқаша сөздиги.* Нөкис: Билим.

Әхмәтҗжанов Марсель

1995 *Татар шәҗәрәләре.* Казан : Казан татарстан китап нәшрияты.

Батырлар...

1989 *Батырлар жыры 5 : Қырымның қырық батыры.* Алматы: Жазушы.

Баҳадырова С.

1992 *Фольклорлық терминлердің қысқаша сөздиги.* Нөкис: Билим.

Башкорт...

1997 *Башкорт халык ижады 2: риүәйәттәр, легендалар.* Өфө : Китап.

Бердібай Раҳманқұл

1995 *Эпос-ел қазынасы.* Алматы : Рауан.

1996 *Байқалдан Балқанға дейін.* Алматы : Қазақстан.

1997 *Эпос мұраты.* Алматы: Білім.

Валиханов Ч. Ч.

1985 *Собрание сочинений в пяти томах: том 3.* Алматы : Главная редакция Казахской советской энциклопедии.

Ғабдуллин М.

1972 *Қазақ халқының батырлық жыры.* Алматы : Ғылым.

1996 *Қазақ халқының ауыз әдебиеті.* Алматы : Санат.

Давкараев Нажим

1959 *Очерки по истории дореволюционной каракалпакской литературы.* Ташкент : Издатльство Академии наук Узбексой ССР.

Диваев Әбубәкір

1992 *Тарту.* Алматы : Ана тілі.

Досмұхамедұлы Халел

1991 *Аламан.* Алматы : Ана тілі.

Ертегілер...

1989 *Ертегілер* 4. Алматы : Жазушы.

Есбергенов Х.

1988 *Этнографические мотивы в каракалпакском фольклоре.* Ташкент : Фан.

Жирмунский В. М.

1947 *Узбекский народный героический эпос.* Москва : Огиз.

1958 Итоги и задачи изучения эпического творчестова народов Средней Азии, *Материалы первой всесоюзной научной конференции востоковедов в г. Ташкенте.* Ташкент : Издательстово Академии Наук Узбекской ССР.

1974 *Тюркский героический эпос.* Ленинград : Наука.

Залесский Бронислав

1991 *Қазақ сахарасына саяхат.* Алматы : Өнер.

Зарифов Х. Т.

1947 *Узбекский народный героический эпос.* Москва: Огиз.

История Казахстана...

1997 *История Казахстана 2.* Алматы : Атамұра.

История каракалпакской...

1994 *История каракалпакской литератыры.* Ташкент: Издательство Фан Академии наук.

История литератур...

1960 *История литератур народов Средней Азии и Казахстана.* Москва : Издательство Московского университета.

История Татарии...

1937 *История Татарии : в материалах и документах.* Москва : Государственное социально-экономическое издательство.

Қазақ шежіресі...
1994 *Қазақ шежіресі. Алматы* : Атамұра.
Карамзин Н. М.
1892 *История государства российского. т. 8*. С-Петербург : Издание Евг. Евдокимова.
Каргалов В. В.
1998 *На границах руси стоять крепко : великая Русь и Дикое поле противостояние 13-18 вв.* Москва : Русская панорама.
Кочекаев Б.-А. Б.
1988 *Ногайско-Русские отношения в 15-18 вв.* Алма-Ата : Наука.
Къырымтатар...
1991 *Къырымтатар халкъ агъыз яратыджылыгъы : хрестоматия.* Тошкент : Фан.
Маданов Хамит
1994 *Кіші жүздің шежіресі.* Алматы : Атамұра.
Манас...
1995 *Манас энциклопедия 1-2.* Бишкек : Мурас.
Мирзаев Тўра
1968 *Алпомиш: достонининг ўзбек вариантлари.* Тошкент : Фан.
Молдаханов Ә.
1997 *Мұхтар Әуезов фольклортанушы.* Алматы : Ғылым.
Мурат Гъани
1991 (Август 28) Чора батыр, *Янъы дюнья.*
Новосельский А. А.
1948 *Борьба Московского государства с татарами в первой половине* 18 *века.* Москва : Издательство Академии наук.
Нурмагамбетова О.
1988 *Казахский героический эпос Кобланды батыр.* Алма-Ата : Наука.
Очерки...
1977 *Очерки по истории каракалпакского фольклора.* Ташкент : Фан.
Родионов В. Г.
1983 К образу лебедя в жанрах чувашского фольклора, *Советскя тюркология 6* : 19-28.
Сагитов И. Т.
1962 К*аракалпакский героический эпос.* Ташкент : Издательство Академии наук Узбекской ССР.
Султанов Т. И.
1982 *Кочевые племена приаралья в* 15-17 *вв..* Москва : Наука.
Сүйіншәлиев, Ханғали
1997 *Қзақ әдебиетінің тарихы.* Алматы : Санат.
Сыдықов Т.
1972 *Қазақ халқының батырлық жыры.* Алматы : Ғылым.
Сыздықова Рәбиға
1994 *Сөздер сөйлейді.* Алматы : Санат.
Татар...
1984 *Татар халык иҗаты : дастаннар.* Казан : Татарстан китан нәшрияты.
Толыбеков Серғали
1992 *Қазақ шежіресі.* Алматы: Қазақстан.
Тынышпаев Мухамеджан
1925 *Материалы к истории киргиз-казакского народа.* Ташкент : Восточное отделение киргизского государственного издательство.
1993 *История казахского народа.* Алматы : Қазақ университеті.
Урманчеев Фатих
1974 *Халык авазы : татар халык бәетләре тарихыннан очерклар.* Казан : Татарстан китап нәшрияты.
1980 *Эпические сказания татарского народа.* Казан : Издательство Казанского университета.
1983 О происхождении и формировании баитов, *Советскя тюркология 5* : 26-36.

Ўзбек халқ...
1967 *Ўзбек халқ ижоди.* Ташкент : Фан.
Фәхретдин Ризаэтдин
1995 *Казан ханнары.* Казан : Татарстан китап нәшрияты.
Хошниязов Ж.
1988 *Этнографические мотивы в каракалпакском фольклоре.* Ташкент : Фан.
Худяков М.
1991 *Очерки по истории казанского ханства..* Москва : Инсан.
Хусаинов Гайса
1996 Башкирская литература 11-18вв. Уфа : Ғилем.
Шора...
1993 *Шора Батыр : дастан.* Алматы : Жалын.
Ыбыраев Шәкир
1993 *Эпос әлемі.* Алматы : Ғылым.

Akdes Nimet Kurat
1966 *Türkiye ve Idil boyu.* Ankara : Ankara Üniversitesi Basımevi.
Bozkurt, Memet Fuat
n. d. *Tatar Destanı* Çora Batur.
Chadwick, Nora K.
1969 *Oral Epics of Central Asia.* Cambridge : Cambridge University Press.
Çorabatır
1965 30 (Eylül-Ekim), *Emel.*
Çorabatır
1984 141-145 (Mart-Aralık), *Emel.*
DeWeese, Devin
1994 *Islamization and Native Religion in the Golden Horde.* Pennsylvania : The Pennsylvania State University Press.
İnan, Abdülkadir
1968 *Makaleler ve Incelemeler.* Ankara : Türk Tarih Kurumu Basımevi.
1991 *Makaleler ve Incelemeler2 cilt.* Ankara : Türk Tarih Kurumu Basımevi.
Is'haki, Saadet
1935 *Çora Batir : Eine legende in Dobrudshatatarischer mundart..* Kraków: Nakłacem Polskiej Akademji Umiejetnosci.
Khodarkovsky, Michael
1992 *Where Two Worlds Met : The Russian State and the Kalmyk Nomads, 1600-1771.* Ithaca and London : Cornell University Press.
Mahmut, Nedret-Enver (hazırlayan)
1988 *Bozcigit : Dobruca Tatar Masallar 1.* Bükreş n. p.
Ortekin, Hasan
1939 *Çora batir: Destanı.* İstanbul : Bürhaneddin Basımevi.
Paksoy H. B.
1986 Chora Batir : A Tatar Admonition to Future Generations, *Studies in Comparative Communism*, 19 (3) and (4) : 253-265.
1989 *Alpamysh : Central Asian Identity under Russian Rule.* Hartford, : Association for the Advancement of Central Asian Research, Monograph Series.
Radloff, W.
1896 *Proben der Volksliteratur der türkischen Stämme Südsibiren 7.* St. Petersburg : Типография императорской Академии наук.
Reichl, Karl
1992 *Turkic Oral Epic Poetry : Traditions, Forms, Poetic Structure.* New York and London : Garland Publishing.

Shoolbraid, G. M.
1975 *The Oral Epic of Siberia and Central Asia.* Bloomington : Indiana University Press.
Togan, Z. V.
1981 *Bugünkü Türkili Türkistan ve Yakın Tarihi.* İstanbul : Enderun Kitabevi.
Togan, Z. V. (tr. Paksoy, H. B.)
1992 The Origins of the Kazaks and the Özbeks. In H. B. Paksoy ed. *Central Asia Reader.* New York and London : M. E. Sharpe, pp.25-39.
Tural, Güzin
1995 Çora Batır Destanı'nın Kırım Varyantları ile Manas Destanı Arasındaki Benzerlikler, *Manas Destanı ve etkileri Uluslararası Bilgi Şöleni.* Ankara : Atatürk Kültür Merkezi.
Ülküsal, Müstecib
1966 *Dobruca ve Türkler.* Ankara : Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü.
Winner, T. G.
1958 *The Oral Art and Literature of the Kazakhs of Russian Central Asia.* Durham, NC. : Duke University Press.
Yüksel, Zühal
1989 *Polatlı Kırım Türkçesi Ağzı.* Ankara : Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü.
Zhirmunsky, Victor
1969 *Oral Epics of Central Asia.* Cambridge : Cambridge : University Press.